自分の専攻は企業でどう活きるのか。企業で活躍するために必要な能力とは

インターンシップとは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行う制度」のこと。雇用ミスマッチの解消や人材育成を目的として、日本では2002年ごろから本格的に企業に導入され始めた。まだインターンシップを実施する企業が少なかった当時、いち早く同制度を取り入れたのが富士通株式会社であった。現在では職場受け入れ型「プロフェッショナルインターンシップ」とワークショップ型「サマーインターンシップ」の2種類を実施する同社に、その意図を伺った。

実社会で自分の専門性を活かすために

自分の専門性がビジネスの場でどう活きるのか、より多くの学生に知ってもらいたい――。そういった想いから、富士通は「プロフェッショナルインターンシップ」で、毎年100以上の多彩なテーマを学生に提供している。例えば、「次世代携帯電話の無線装置開発」「最先端CPU向けテクノロジ立ち上げ」「政府系金融機関におけるシステム開発」「科学技術分野（宇宙・気象・天文・原子力など）のシステム開発」といったように、テーマの大半が各事業部の現行プロジェクトに基づいて設定されている。

実施期間は3週間（実働15日）。参加者は自分の都合に合わせて実施時期を選ぶことができる。

また、事前にマッチング面談を実施し、職場が提供できるプログラムと、学生が希望する実習内容や本人のスキルとを擦り合わせた上で業務が割り振られるため、オーダーメード型のプログラムであると言える。打ち合わせに参加したり、製品開発に携わったり、先行技術の研究をしたりと、社員と机を並べて実際の業務を体験できる点が、同社のインターンシップの特長だと言えよう。

「特に理系学生にとっては、専攻を活かせる仕事を体験したり、インターンシップを通して今後の自身の研究の方向性を考えることができるという点で意義があります。職業選択や進路を決める手掛かりとして、もっとインターンシップを活用してもらいたいですね」

大学での専攻を活かせるかどうかは、仕事次第。イメージだけで企業や仕事を選ぶのではなく、実際の業務を経験し、仕事を見抜く目を養う。納得できる就職活動をするためにも、ぜひプロフェッショナルインターンシップを経験してもらいたい。

社会人に必要な基礎力を身に付ける

一方で、これから仕事や自身のキャリアについて考えるという学生に対しては、ワークショップ型の「サマーインターンシップ」を実施している。

富士通のケーススタディをベースに、お客様の経営やビジネスにおける課題をITで解決するにはどうすればよいか、IT業界で働く醍醐味は何か、といったことが体感できるほか、社会の仕組みや業界知識、ビジネスに必要な考え方などを分かりやすく学ぶことができる。

毎年プログラムの内容は変わるが、一貫して学生の「社会人基礎力（※注）」の向上を目指している。社会人に求めら

れる力はどういうものなのかを知り、自分自身の課題に気付き、今後の指針につなげるプログラムになっているという。当然、数日間では限りがあるため、「重要なのは、今後の大学生活でいかにそれらの能力を継続的に伸ばしていけるか」。短期間で画期的な能力が身に付くものではないが、社会人になるに当たっての自分の課題が認識できる点で、参加する意義は大きい。なお、社会人基礎力は前述のプロフェッショナルインターンシップでもプログラムに組み込まれているとのこと。

激動する社会で活躍できる人材とは

富士通がインターンシップで社会人基礎力のプログラムをそこまで重視しているのはなぜなのだろうか。「激変する社会において求められる人材は、学力や専門知識を持っているだけではなく、それらをうまく活用できる人。学力や専門知識を活かす土台になるのが社会人基礎力だと考えているからです」と松村氏はその理由を明かす。

「激変」という意味では、IT業界にも大きな変化が訪れようとしているようだ。同氏によると、今後ITの世界は「人がコンピュータに合わせるIT」から、「ITが人の活動を支援する、ヒューマンセントリックな（人中心の）IT」へと変化していくという。

例えば、体に付けたセンサーで血圧や脈拍・体の傾きを測ることでお年寄りの生活をサポートできたり、構造物にセンサーを取り付けることで地震などの災害発生直後に安全診断を行うことができたりと、私たちの仕事や生活は、大きく変わるだろう。

「人中心のITへとシフトすることで、IT業界はコンピュータサイエンスを勉強している人ばかりでなく、さまざまな分野の専門性を持った方がより一層活躍できるフィールドになっていくでしょう。自分の知恵やアイデアをITで実現することによって、世の中を変えることだって不可能ではありません」

活躍できる企業を見抜く力も養おう

富士通では、2011年新卒採用より新しい採用コースを導入した。その名も「Challenge & Innovation採用」。学生時代に何かの分野で高い実績を上げた学生を対象に、個性豊かな尖った人材を採用するのが狙いだ。

「挑戦するマインドや実績に至るまでのプロセス、その経験によって得た自信や自立心を評価したいと考えています。当社が求めているのは、これまでの努力や実績、成功体験をもとに、新しいことにチャレンジしていける人です。当社は常にチャレンジし続け、ITでお客様のビジネスや社会を変革することを目指しています。積極的にチャレンジし続ける人が活躍できる土壌が、当社にはあるのです」

「プロフェッショナルインターンシップ」のような職場受け入れ型のインターンシップからは、実際の業務でどのように専攻を活かせるのかを実感できる。また、「サマーインターンシップ」のようなワークショップ型のプログラムでは、社会人として求められる力について知ることができるだろう。ただ、自分が活躍できる会社を選ぶには、さらに「自分の気質・適性に合った会社か」を考えて選ぶことも重要なのではないだろうか。

「お客様のビジネスや社会を変革することを目指してチャレンジし続ける人を求めている」という富士通の社風はどういうものか。インターンシップを通じて、その目で確認してみてほしい。

（※注：経済産業省が定義。前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力の3つの能力からなる、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力のこと。「主体性」「働きかけ力」「実行力」「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「情況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の12要素で構成される）

理系学生へのメッセージ

理系の学生に期待するのは、いかに真剣に研究に取り組んできたのかということ。アルバイトやサークルなどの課外活動でアピールするのではなく、自分自身の専門性や技術に誇りを持ってほしいと思います。

その一方で、ぜひ学生のうちから社会との接点を持ち、世の中に向けてのアンテナを高くしてほしいと考えています。今世の中の状況はどうなっているのか、何が求められているのか、どういう問題や課題があるのか、技術でそれらを解決するにはどうしたら良いのかなどを常に考えつつ、自分自身の将来を考えてみてはいかがでしょうか。

知らない世界をのぞく楽しみ。理系にはこんな仕事もあるんだ

インターンシップの目的の一つは、自らの専攻と関連性の高い職業の就業体験を通して、キャリア意識を高めてもらうことにあるという。一方、これまでの理系の学生としての生き方には、まったく関連のなさそうな業界で気軽に就業体験できるという魅力もある。

特にサマーインターンは就職活動の色合いが薄い時期だけに、普段の研究生活とは縁遠い業界を垣間見るのに絶好の機会。理系とは一見、縁遠いようにも思われるが、実は理系出身者の多い金融業などは狙い目の業界なのかもしれない。

理系出身者が非常に多いというドイツ証券株式会社。同社をはじめ、金融各社が理系を求める訳とは――。

知られていないホントの金融ビジネス

金融業と聞いてどんなイメージを持つだろうか。銀行や保険、株式や為替のトレードといったところが一般的なイメージかもしれない。だが証券会社などは、実は外から見えないところで、さまざまな企業の活動を支えている。例えば1ドル90円台で為替が取引されている中、75円で1ドルを買えるとしたらどうなるだろうか。アメリカをはじめ、世界各国で事業を展開するための資金を有利な条件で調達できるようになるため、日本企業にとってはかなり有利になるだろう。

「そんなことはできる訳がない」と思った人も居るだろうが、それを現実の話にしているのが金融業界で働く理系の力だ。今回取材に応えてくれたドイツ証券株式会社の小林啓氏は理系出身。まさにここで紹介したような金融商品の分野で、業界をリードする人物だ。

一部マスコミの偏った報道などから、金融業に対してネガティブなイメージを持つ人も中には居るかもしれない。だが、「お客様が損をして、われわれがもうかっていたら取引は続かない」と小林氏は理を説く。「新しい要素を加えることで、お客様もわれわれも得をする。みんなが幸せになれるようなビジネスを築くことが、われわれの務めです」と。

実際、過去にドイツ証券のサマーインターンシップに参加した学生からは、「金融業を誤解していたが、イメージが変わった」「理系にはこんな仕事もあるんだと驚いた」といったポジティブな声が挙がってきたという。

理系学生にも人気のドイツ証券のインターンシップ。その内容はどんなものなのだろうか。

外資金融の現場に踏み込める貴重な機会

「証券会社＝株と為替」だけではない。国債や社債などの債券、金利、デリバティブと呼ばれる株・為替・債券・金利の派生商品、信用リスクを取引するクレジット・デリバティブなども証券会社が取り扱う商品になる。

ドイツ証券のグローバル・マーケッツ統括本部のインターンでは、まずこうした金融業界の仕組みについて、現場で働く社員から講義を受ける。その後、トレーディングやリサーチ、セールスといった部署をデスクローテーションで実地見学することになる。分刻みに変化するマーケットの動きに対応する緊張感溢れる外資系証券会社の業務

風景を、真横で見られる機会はめったにないだろう。またグループに分かれて、課題に取り組んだり、短時間で自分の考えを論理的にまとめ、発表するような機会も与えられている。

目玉はやはりデスクローテーションだろうか。将来、一緒に働くかもしれない社員の人柄、仕事ぶりなどをじかに見ることができる。相場が急変し、一瞬で担当社員に質問もしにくい状況になったり、英語での激しいやり取りに圧倒されたり、すべてが貴重な体験。忙しい業務時間の合間を縫って、社員は可能な限り話をする時間を作ってくれるというから、参加する学生の側も1分1秒を大事にしてインターンに臨んでもらいたい。

金融業界はなぜ理系を求めるのか

冒頭で取り上げたように、ドイツ証券社員の経歴を見てみると、理系出身者が驚くほど多い。「金融＝経済学」というイメージは安直過ぎるだろうが、金融業界はなぜそこまで理系に門戸を開いているのだろうか。

一つには、金融業界が理系の持つ専門性を求めているという背景がある。例に挙げた小林氏の手掛ける金融商品のように、理系の数学力を駆使して高度な数理モデルを構築できないと、顧客に魅力を感じてもらえるような新商品の開発は難しい。低金利な円で高金利な外貨を調達して、さらにその外貨のままでどの程度の運用益を見込んで資金を運用し、損失が発生した時のためにどの程度のバッファを見ておくか。そうした計算が理路整然とできるような人材が求められているのだ。

もう一つには、企業組織として多様性を持つため、さまざまな発想ができる人材を得たいという気持ちもある。先の例で言うなら、高度なモデルを使った金融商品は、原理を知らないと説得力を持って販売できない。セールス部門にとっては、物おじせず、トークがうまい文系出身者も必要だろうが、商品を十分に理解して分かりやすく説明してくれる理系出身者も将来のエース候補になるのだ。

「一緒に働こう」と言ってくれた人の下で働ける。それも外資証券の魅力

現時点で金融業界への就職を考えている学生の数は多くないかもしれないが、小林氏も「学生時代は証券会社への就職なんて考えてもいなかった」という。そんな小林氏にとって転機になったのは、先輩に誘われた外資系の証券会社でのアルバイト。「任されたのはプログラムの仕事でした。その時、初めて金融業でも理系で学んできたことが活かせるんだと知りまして。それからしばらく勤めるうちに『この人たちと働きたい』と思うようになったのが、金融業界に飛び込んだきっかけです」

小林氏のように「どんな人と一緒に働けるか」という視点で企業を選ぶ学生も居るだろうが、そういう選び方をするなら、外資金融は良い選択肢になるかもしれない。というのも、日系企業のように人事部が大量に学生を採用して部署を振り分けるのではなく、部署の責任者やチームメンバーが面接を行って採用を進めていく。どの部署でどんな上司・同僚、どんな仕事が待っているのか、入社後の自分をイメージすることが可能だ。「自分の働いている姿を外資金融が一番思い浮かべやすかった。それが私の決め手になりました」とは小林氏の談だ。

一緒に働きたいと思える相手が居るかどうか。外資系証券会社では自分の目でそれを確かめることができて、「一緒に働こう」と言ってくれたチームの中で働くことができる可能性が極めて高い。

そんな就職活動を考えている人、あるいは野次馬根性も込みで金融の現場をのぞき見したい人。そんな人たちはこの夏、ドイツ証券のインターンに申し込んでみてはいかがだろうか。

理系学生へのメッセージ

サマーインターンではもちろん金融業界を見ていただきたいのですが、興味を持っていろんな業界を回ってほしいですね。
就職活動というのは、さまざまな企業が学生を受け入れてくれるめったにないチャンス。「理系だからメーカー」と思い込むのではなく、金融を見てみるとか、商社を見てみるとか、メーカー以外にも目を向けてみてください。
視野を広く持ち、その中に金融業界を入れていただければ幸いです。